

第 25 回 BC 州日本語弁論大会  
2013 年 3 月 2 日 (土)  
優秀作品集

BC 州日本語弁論大会実行委員会

この作品集は、参加者の原稿を元に BC 州日本語弁論大会実行委員会が編集したものである。

## 第 25 回 B C 州日本語弁論大会

日時：2013 年 3 月 2 日 土曜日 午前 10 時 00 分

場所：University of British Columbia, Asian Centre

コーディネーター：Noriko Omae (SFU/サイモンフレーザー大学)

Rebecca Chau (UBC/ブリティッシュコロンビア大学)

Ihwa Kim (UBC/ブリティッシュコロンビア大学)

司会者：Elisa Tang and Parris Hemphill

審査員：Cathrine Conings (Alpha Secondary School)

Tomoko Bailey (JALTA)

Ritsu Muratake (H.I.S)

Yukari Miyazaki (UBC-Ritsumeikan)

Masaaki Nishira (Kiyukai)

Ikuko Itoh (UBC)

Joshua Mostow (UBC)

Nobuyuki Naito (Mitsui Canada)

Hiroyuki Numao (Konwakai)

Kazuko Mito (Capilano University)

出場者：

### 【高校 初級】

- |                  |         |                      |
|------------------|---------|----------------------|
| 1. Ellen Chuan   | オタクの人生  | Otaku's Life         |
| 2. Andy Kim      | ひげそり    | My First Shaving     |
| 3. Keya Li       | ギャル文化   | Gal Culture          |
| 4. Jenny Park    | 小さい手紙   | Small Letter         |
| 5. Carissa Wong  | めばえた自立心 | Growing Independence |
| 6. Yueling Zhang | 私の友達    | My Friends           |

### 【高校 中級】

- |                 |          |                                     |
|-----------------|----------|-------------------------------------|
| 1. Si Yu Chen   | 初恋       | First Love                          |
| 2. Peggy Li     | 意識革命     | Revolution Against My Consciousness |
| 3. Eric Lin     | 平和に向けて   | Toward Peace                        |
| 4. William Qian | 困難を乗り越えて | To Overcome Challenges              |
| 5. Eva Qiu      | 日中友好のために | For China-Japan Friendship          |

### 【高校 オープン】

- |                 |              |  |
|-----------------|--------------|--|
| 1. Kevin Espig  | 勉強の大切さ       | The Importance of Studying                   |
| 2. Tielia Young | 中国人をやめたくなった日 | The Day I Don't Want To Be A Chinese Anymore |

【大学・一般 初級】

- |                       |                               |                                      |
|-----------------------|-------------------------------|--------------------------------------|
| 1. Mohammed Al Hamdan | 漢字よりいいシステム                    | Better System Than Kanji             |
| 2. Veronica Diaz      | 『お母さんに似ているね』                  | She Is Like Her Mother, Isn't She?   |
| 3. Surin Jung         | 偏見なく世界を見ましょう                  | See The World without Bias           |
| 4. Viola Li           | 私の履歴書                         | My Resume                            |
| 5. Kunal Moorjani     | ピアノ教師・・・<br>ただ座っているだけではありませんよ | Piano Teachers... We Do Not Just Sit |
| 6. Salman Naier       | 夢をおいかける                       | The Pursuit of Dreams                |
| 7. Andy Trane         | 薬の問題                          | The Problem With Medicine            |

【大学・一般 中級】

- |                     |                  |  |
|---------------------|------------------|--|
| 1. Nabila Chowdhury | 忘れかけていた自分の一部     | The Forgotten Part Of Me   |
| 2. Summer Fang      | 上を向いて、歩こう        | Walking While Looking Up   |
| 3. Lydia Huang      | わたしのために          | For Myself   |
| 4. Yei Wen Kim      | 人間万死塞翁 が馬そして転禍為福 | In Life There Are Always Ups And<br>Downs, And Turn Misfortune To<br>Advantage |
| 5. Jennifer Luzi    | フェミニズムとわたしの生活    | Feminism And My Life   |
| 6. Ashley Wang      | 守る者              | The Protector  |
| 7. Kaiyan Wang      | 心のパートナー          | Spiritual Partner  |

【大学・一般 上級】

- |                         |                |  |
|-------------------------|----------------|--|
| 1. Vivian He            | 移民であることを、大きな声で | To Say That I Am An Immigrant,<br>A Louder Voice |
| 2. Carol Lau            | おもちゃというのは      | Toys   |
| 3. Joseph Watson-MacKay | ひとすじのきぼうの星     | Star of Hope                                     |

【大学・一般 オープン】

- |                    |              |                             |
|--------------------|--------------|-----------------------------|
| 1. Keiju Sekiguchi | 涙のディズニーランド旅行 | Disney Land Trip in Tears   |
| 2. Steven Shibata  | 人生の雑草        | Life's Weeds                |
| 3. Olga Tarasenko  | 私の人生を変えた小説   | Novels That Changed My Life |

## 入賞者

### 【高校部門】

初級部門	第1位	Jenny Park	小さい手紙
	第2位	Andy Seonghyeon Kim	ひげそり
	第3位	Carissa Wong	めばえた自立心
	特別賞	Keya Li	ギャル文化
中級	第1位	William Qian	困難を乗り越えて
	第2位	Eric Lin	平和に向けて
	第3位	Eva Qiu	日中友好のために
オープン	第1位	Kevin Espig	勉強の大切さ
	第2位	Tielia Young	中国人をやめたくなった日

### 【大学・一般部門】

初級	第1位	Kunal Moorjani	ピアノ教師・・・ただ座っているだけではありませんよ
	第2位	Viola Li	私の履歴書
	第3位	Surin Jung	偏見なく世界見ましょう
	特別賞	Andy Trane	薬問題
中級	第1位	Jennifer Luzi	フェミニズムとわたしの生活
	第2位	Nabila Chowdhury	忘れかけていた自分の一部
	第3位	Summer Fang	上を向いて、歩こう
上級	第1位	Vivian He	移民であることを大きな声で
	第2位	Carol Lau	おもしろいというのは
	第3位	Joseph Watson-Mackay	ひとすじの希望の星
オープン	第1位	Steven Shibata	人生の雑草
	第2位	Olga Tarasenko	私の人生を変えた小説
	第3位	Keiju Sekiguchi	涙のディズニーランド旅行

### 小さい手紙

私には、大事な小さい手紙があります。小さい手助けでも、人を動かし、変えることができると手紙はかたってくれます。

ある日、学校の担任の先生が私に、素晴らしいボランティアの仕事を紹介してくださいました。今まで、したことがない、韓国語を多文化家庭の子供に教えるという仕事でした。この新しい挑戦に、私はとても興味がありました。一週間に二回ほど勉強ルームに行って無料で韓国語を教えました。私の生徒は七歳のソラちゃんと、九歳のソイちゃんです。

ソラちゃんは とても活発で可愛くて幼くて、みんながソラちゃんを可愛がりました。でも、二歳年上のソイちゃんは いつも静かに一人で遊んでいました。一人で、もくもくと折り紙をしている寂しそうなソイちゃんを見て、可哀想で私の心は痛みました。

ある時、私はソラちゃんに、折り紙を探しに行くよう頼みました。ソラちゃんがない間に、私は『ソイちゃんごめんね』と言って、そっと抱いてあげました。ソイちゃんの中から、とても小さくて、あたたかかったです。まず、ソイちゃんはびっくりして、それから、にこっと笑いました。それからは、私に心の門を開き、授業中も質問をするようになったのです。ソイちゃんの声はだんだん自信に満ちて、大きくなりました。そのうち、ソイちゃんが私に大変似ていることに、気づきました。自然が好きなこと、静かな公園を歩くのが楽しいことなどです。ソイちゃんが 私の妹みたいに思えてきました。

私は、高校に入り、別れの日が来ました。院長先生は、最後の日、小さなお別れパーティーをしてくださいました。ソイちゃんはずっと笑顔をみせていましたが、私は何だか、とても悲しかったです。勉強ルームを出ようとする、ソイちゃんが、沢山の人の中から走ってきました。そして私に抱きついてきました。みんな、驚いて私たちを見ました。ソイちゃんは私の服に顔をうずめて、私の手に小さい手紙を渡しました。この小さい手紙には、短い別れのあいさつと、ありがとう、ということが書いてありました

私はソイちゃんに本当の妹のように、接しました。ただそれだけなのに、ソイちゃんは、心を少しずつ開いてくれました。沢山の人の前でも恥ずかしがらずに、渡してくれた手紙は私の宝です。私の小さな手助けがソイちゃんの未来を開くことができたように思いました。

## ひげそり

みなさん、こんにちは。僕の名前は、アンディです。この冬休みに、初めてひげをそりました。その時の、話をします。

「アンディ、バンクーバーに行くまで、待ってて。」ビデオチャットしていた父が言いました。僕の家族は 5 年間、離ればなれで暮しています。僕の父は、キロギです。キロギは韓国語で、wild goose という意味です。Wild goose は、群れから離れて一人で生活するから、僕の父のように家族と離れて韓国に一人でお父さんをキロギと呼びます。

僕は 15 歳にしては、小柄ですが、そろそろ思春期を迎えています。僕の声はどんどん低くなり、鼻の下にはひげが生え始めました。

学校で、友だちに「アンディ、鼻の下に何があるの？」と言われてたり、先生にひげをさわられたりするようになりました。

スクールフォトの 2 日前に、母にひげ剃りを買ってもらおうようにたのみました。きれいな顔で写真に写りたかったからです。その日、僕とビデオチャットをしていた父が「アンディ、バンクーバーに行くまで、待ってて。」と言いました。「お父さんが剃ってあげるから。」父が来るのを待っていたから、僕の Grade10 のスクールフォトの中で、僕の鼻の下は真っ黒に写っているはずです。

冬休みに、父がバンクーバーに来ました。電気ひげ剃りも一緒でした。父は僕に使い方を教えてくれました。そして、母はその様子をビデオに撮っていました。子どもの頃から、父がひげを剃っているのを見てきましたが、自分が同じことをするようになるとは、考えてもみなかったことです。ちょっと、不思議な感じがしました。

父が僕のひげを剃りながら「大きくなったな」と言いました。そして「アンディが父親になったら、こうして息子のひげを剃ってあげるんだよ。そしたら、お父さんの気持ちがわかるよ」とも言いました。僕は、父がバンクーバーに来てくれて、本当によかったと思いました。

父と僕は、離れて暮しているけど、父からのたくさんの愛を感じました。

父には、たくさんのひげがあります。将来、父が年をとって弱くなってきたら、今度は僕が父のひげを剃ってあげようと思います。そのとき、きっと、この冬休みに僕のはじめてのひげ剃りを父がしてくれたことを思い出すと思います。

お父さん、サランヘヨ。

### めばえた自立心

「留学は絶対自分に役立つ！」 香港の学校で留学ガイダンスがありました。それを聞いていて、そう思いました。人見知りの内気な自分を変え、その上、英語も上達できる絶好のチャンスだと考え、留学することを決めました。今から約二年まえ、カナダに母とやってきました。父は仕事があるから、香港に一人残りました。カナダの生活は、はじめはとても楽でした。学校の規則はあまり厳しくなくて、授業中お菓子をたべたり、携帯を使うことを許されたりします。香港と違って色々な国の文化や習慣を肌で感じる事ができ、視野がひろがりました。でもこの楽な生活は8ヶ月で終わりました。母が突然耳が聞こえなくなったのです。ちりょうのため、香港に帰ることになりました。だから、私はおばの家にひっこしました。

両親がいない環境は生まれて初めてだったので、ときどきホームシックになりました。十二年生になって、忙しさがまし、希望の大学に入るために、もっと勉強しなければいけないし、ボランティア活動や、忙しいおばに代わって、家事も自分でしなければなりません。ほんとうにたいへんです。母にいつも家事をやってもらっていて、あまえていたことに気がつきました。問題があっても自分で解決しなければなりません。ストレスがたまっても、母に甘えることもできません。本当の留学生の生活をここで初めて実感しました。

カナダにきたことに大きな価値があると思います。それは英語以外にまなんだことが多かったからです。今の私はまだ人見知りですが、カナダにくる前の私と比べたら、うんでいのさです。ここでは、私をしらない色々な人と出会うので、違う私になって話すことができるのです。そして、問題や悩みがあったら自分を信じて、みずから問題をかいけつしようと 前向きになりました。このすべてが、自立をたすけて、これからの生活だけではなく、勉強や仕事にも、とても役に立つと思います。

でも、やっぱりりょうしんに甘えたいし、香港にも帰りたくなります。本当の自立は、まだまだこれから始まります。

### 困難を乗り越えて

皆さん、こんにちは。ウィリアムです。

この世界には、目には見えないものがあります。それは優しく、とても甘い。もし見ることができるなら、誰でもそれが欲しいでしょう。だからこそ、世界はそれをかくし、私たちの目の前から盗もうとします。そう簡単に、手に入らないようにするために。その宝物は「幸せ」と言います。

「幸せ」の形は人それぞれです。どんな問題でも、家族が力を合わせて乗り越えて行くこと。それが、私にとっての「幸せ」です。

わたしと母は中国からカナダに移住しました。2008年の12月のことでした。文化と言葉が全く違う国にの私は私たちが思っていた以上に難しかったです。まず、言葉の問題。母も私も英語が全然分かりませんでした。初めの一週間はずっと二人で英語の勉強をしました。英語ができないから、もちろん、住宅事情も分かりませんでした。ひとまず、私が行く学校のそばにアパートを借りました。母は以前から人がたくさんいる場所が好きでした。でも、私たちがすむようになった所は中国で住んでいた家とは違い、すこし寂しい場所でした。母は、「いいところだね」と言いましたが、内心私のためにがまんをしていることはわかりました。父は仕事のため、すぐに中国に帰りました。それが、辛かったです。でも一番寂しいのは、多分母でした。母は中国では、外で働いていました。カナダに来て、初めて専業主婦になったのです。最初、母は、家事が苦手でした。でも、私が手伝おうとすると、「お母さんがやるから。」と言って、わたしには、手伝わせてくれませんでした。私のために、父とはなれて、知らない国に来て、言葉を習い、苦手な家事をぜんぶこなし、いつも私の事を考えていてくれました。

今、私たちはカナダの生活に慣れ、ここが私たちの家だと思えるようになりました。私たちは今幸せです。これは母の犠牲のおかげでつかんだ幸せです。でも不思議な事に、あの頃の事を思い出すと、心に温かいものが湧いてくるのはなぜでしょう。当時は、私も母も精一杯でした。私は、母を失望させないように、一生懸命に勉強し、半年ぐらいでESLを終了しました。私立の高校に入るために、SSATと言う試験を受け、ST.GEORGES高校に合格する事ができました。母も英語を学び、母なりに生活を楽しんでいます。私たちはいま満ち足りています。

今振り返ると、こんな事は一生に一度の経験でしょう。母と一緒に乗り越えて来た困難は私たちの宝物です。これから何かに挑戦しようとしている人たちに、私はメッセージを送りたい。今目の前にある困難はいつか必ず乗り越えられるはずです。家族が力を合わせれば。これが、家族と分かち合える幸せではないでしょうか。

みなさん、聞いてくださって、ありがとうございます。

## 平和に向けて

四年前、僕は中国からきました。ぼくは自分の国を愛しています。でも、外から見ると、中国には問題がたくさんあります。政府は汚職や賄賂問題が深刻で、インターネットのじょうほうそうさもしています。しかし、最も重要な問題は中国の外交です。

僕がカナダに来たばかりのとき、英語が下手で、たくさんの人に僕の英語を笑われました。それとどうじに多くの北米の人に「中国はきょうさんしゅぎで、自由がなくてきょういくがおくれている。それに多くの問題をかかえている。」と言われました。でも僕の英語では反論することができませんでした。特に中国人は無知であつかましくてゆうこうてきでないと言われたのは、口惜しくて悲しかったです。どうして間違った見識を持っているのだろうか。中国人の中には悪いことをする人もいます。でも、圧倒的多数の人は心の優しい人たちです。僕のふるさとの人は、とても温かくて、謙虚で親切です。

「昨日の敵は今日の友」、半年後、僕の英語はめきめき上達しましたが、仕返しでなく、ごかいを解くために、何が本当のことかさまざまな問題について話しあうようにしました。次第にその中から友達もできてきました。まさに「昨日の敵は・・・」です。

国家間の問題も同様でしょう。中国は五千年の歴史があります。僕は中国が世界の人に力でなく、尊敬される国であってほしいと思います。これからの中国はどうあるべきか。今、中国は日本との問題をかかえています。千九百七十二年、中国と日本の外交関係が樹立されました。そのとき、周恩来首相とたなかかくえい首相の会談は新しい両国のまくあけでした。若いとき、周恩来は日本へ留学したので、日本人の友達がたくさんいました。戦争のとき、おたがいにとっても悲しかったそうです。戦争は大衆を苦しめます。戦争の後、「日本の大衆はむじつ」と周恩来は言いました。今、戦争がおこれば、大変な時代になることは間違いないです。紛争をふせぐにはどうしたらよいでしょうか。僕は人的交流がかぎだと思います。中国人の若い世代として、ぜひ、平和をまもっていきたいと思います。

こだいの中国の諺：わをもってとうとしとなす。多くの紛争と衝突の原因は小さい誤解です。友情が平和を、平和が友情を生むと信じます。

## 日中友好のために

世界歴史を習っているごろ、私はいつも不意に日本文化の独特さに驚嘆してしまいます。中国とそんなに離れていない日本は、選択的な文化輸入を使って、自分自身の伝統文化を発展し、拡大しました。 今日まで続いている多くの風俗習慣では、もう中国の影がいっさい見当たられません。

今はもう、日本も中国も世界経済大国で百年前に比べれば、ずいぶんと強くなっています。けれど、1700年以上の交流歴史ももっている両国は、どうして今こんなに気まずい状態に置かれているのでしょうか？ これは明らかに、戦争のせいだとおもいます。戦争が日本と中国の間に長く存在していた信頼関係を奪ったのです。でも、こんな、自分の隣人や昔の友も信用できない状態はいつまで続くのでしょうか。親友同士の間でも、けんかぐらい多少はしたことあると、私はおもいます。というか、逆に一度も喧嘩したことないほうがおかしいです。国と個人は並べものにならないのは知っていますが、中国と日本は、ただ政治的な意味ではなく、真剣に仲直りするべきと、私は強く信じています。わたしが日本語が喋られると知った中国人の友達は、ほぼみんなそれでまず私のことを褒め称えてくれました。しかし、その後で、いつも冗談半分に「この裏切り者め」って、私を茶化しました。そんなジョークに、苦笑いしかできませんでした。

2010年の上海万博で、運よく日本館に見学することができました。バイオリンが弾けられるロボットもすごかったのですが、一番印象深かったのは、やはり鑑真の物語でした。12年間も費やして、両眼が失明しても、彼は日本に文化を交流しに行くのをあきらめませんでした。彼の精神は立派で尊敬しています。私のジェネレーションこそ、両国間の架け橋になり、昔の鑑真のように、日中友好のために力を尽くすべきではないでしょうか。これからも、わたしは頑張って日本語を勉強して、身に付いて、将来日中関係のためにより多くの力を捧げたいと思っています。

## 勉強の大切さ

ヨハン・クライフというオランダ人の元サッカー選手をご存じですか？彼はたくさんの名言を残していますが、そのなかでも僕にとって印象深かったのが、自らが指導する選手達に対していった「サッカーも大事だけど、勉強もしっかりやっておきなさい」という言葉です。その理由を聞けば単純で、サッカー選手は努力に関わらず怪我や巡り合わせで成功できないことが多いから、ということでした。私は少し前までは微分積分や2次曲線など勉強していて意味があるのかふと考える時間が多々ありました。いろいろな職種の業務内容を読んでも「三角関数を使って。。。」「極限值から係数決定を行って。。。」など、耳にした事はありません。ましてや試験の為に何ヶ月も前から準備する現在の教育に疑問をもっていた時期がありました。しかし、ここで僕が言う勉強、つまり学問を学ぶことはとてもメリットの多い事だと気付きました。

まず人は勉強をすることによって新しい知識を吸収しやすくなります。これは今年心理学の授業中習ったのですが、我々人間の記憶は情報を他の情報とリンクする事によって短期的な記憶から長期的なものになっていきます。つまり勉強で得た新しい情報を既に存在する情報とリンクすることによってより、効率よく吸収出来るのです。次に、学ぶ環境では素晴らしい人脈を他の生徒や先生たちと築き上げる事が出来ます。例えば、このスピーチコンテストを紹介してくれたのも私の学校の先生で、勉強以外にも大学に向けていろいろな指導をしてくれます。また勉強は私たちに理解力、事務処理力、そして持続力を身につけさせるのに一番効率的な方法です。勉強する事は殆どの人にとっては自分との戦いです。好きでやっている人は稀だと思います。しかし、そうやってやりたくない、苦痛な、そして時にはつまらない勉強でも私たちの分析力を豊かにし、また頑張る大切さを教えてくれます。そして、なにより嫌いなことからめげずにひたすらゴールするまで走り続ける事が大事だと教えてくれます。未来は予測不能です。とある統計によると現在存在する約75%の職業は25年前には存在しませんでした。つまり我々は常に進化して行く世界に住んでいるのです。どんな急カーブを曲がるかわからない世の中において知らぬ間に自分たちの道が学歴のせいで狭まれるよりは準備万端のほうが良いと思います。

このように、私は勉強とは人生をよりよくする道具だと思います。そして今日私がここに立っているのも何が起こるかわからないからです。このスピーチを機に新しい人と出会えたり、今後の進路に対して有利に働くことだってあるかもしれません。もしかしたら、ただのいい思い出になる可能性だってあります。結論から言うと、やらない後悔よりやって失敗する方がいいということです。勉強は人生という何が出来上がるかわからないパズルのピース集めの一環なのです。

## 中国人をやめたくなった日

皆さんこんにちは。僕は中国で生まれて、16歳のときカナダに来ました。中国では、去年、尖閣諸島問題で各地でデモや破壊活動がおき、莫大な損害を日本企業と、中国の国民に負わせました。僕は、無残に焼けてしまった工場や車、それら人々の狂気を伝えるニュースから、目をそむけずにはいられませんでした。胸が苦しくなって、どうしてこんな気持ちになったのか、自分でもびっくりしました。

僕は反日教育を受けて育ちました。特に軍人だった祖父から、強い愛国心と国の指導者への忠誠を教えられてきました。でも、カナダに来てから、台湾人や日本人や、いろいろな人とであって、今まで自分が信じていたことを疑うようになりました。世界は実は僕の知っている形ではなかったのです。では、僕が教えられてきたことは何だったのでしょうか？根強く僕たちがたたきこまれた反日思想とは何なのか、僕なりに考えてみました

中国の反日思想は、愛国心でも日本に対する怒りでもないと思います。第二次世界大戦後、大躍進政策や文化大革命など、いくつもの失敗の政策に国民は苦しみました。人々は飢餓の中でうろたえ、絶望し、不満のはけ口が必要でした。このカオスの中に反日思想教育が生まれました。実は、政府は、国民の怒りをかわすことさえできれば、誰でもよかったのです。そこで、それまで戦っていた日本が都合がよかったので、反日思想を利用したのです。皆の怒りの矛先をかわした政府は、国民を犠牲にした独裁をしてきました。そして、国民の不満は情報規制などで、抑えようとしてきました。たとえば、僕は中国にいた16年の間、一度も天安門事件について聞いたことはありませんでした。

そう気がついてからは、胸の痛みは深まる一方です。世界観が覆されて、なにも信じられなくなってきました。中国にいたときは、考えることなくただ言われた通りに生きていけばいい、それなりに楽な日々でした。でも、今は、憎しみや妬みに身を任せて行動する中国人は醜いと思うし、そんな姿を見るのは耐えられなくなりました。せめて、親しかった友人には自分の気持ちを伝えようとしてきましたが、友人の反応は思いがけないものでした。裏切り者のスパイ扱いされてしまったのです。親友一人にさえ、僕の気持ちをわかってはもらえませんでした。それほど中国に住んでいる人はまだ政府の言うことを鵜呑みにしているんだなあと、むなしさでいっぱいになりました。さらに、僕の中には中国の真実を知ることへの怖さもあります。もう、中国に関するニュースなど見たくない、聞きたくない、目をつぶりたいと思います。できれば、中国人をやめたいとも思いました。

でも、実際それはできません。僕の中に流れているのは紛れもなく中国人の血。現実逃避しても自分らしくそをつくことはできません。ではどうすればいいのでしょうか？たった19歳の今の僕に何ができるのでしょうか。

僕は、中国の人々に希望を持ちたいです。インターネットも普及した今、政府も完全な情報規制は続けられないでしょう。何でも日本を悪者にして、国民を騙し続けることができなくなるのも時間の問題でしょう。中国の国民も確実に成長してきているに違いありません。そして僕も、真実を学ぶために勇気を持って、今まで自分が信じてきたものを白紙に戻して見直すことから始めたいと思います。

### ピアノ教師・・・ただ座っているだけではありませんよ

私はピアノの教師です。ほとんどの人は私にこういいます。「あなたはなんて運がいいんでしょう！ただ座っているだけで、教えて、給料を貰っていて、羨ましいですねえ！」でも、これは本当ではありません。私はレッスン中、立っています！ピアノ教師はかんたんな仕事ではありません。それに、ピアノ教師が成功するためには、音楽の知識と忍耐心とビジネス・センスを持っていなければなりません。

音楽の教師には専門的な知識が必要です。大学ではいろいろな先生から教え方を学びました。私がピアノを教える時、一番難しいのは一人一人の生徒の個性に合わせて教えることです。音楽の理論を勉強したい生徒もいます、楽譜を読むより耳で習うほうが好きな生徒もいます。また、絵や言葉が好きな生徒もいます。時々、私は生徒と音楽の意味を考えて、物語を作ります。物語を聞いて、生徒たちは想像力を使うので、素晴らしい演奏ができます。また、音楽を理解するために、楽譜の分析も教えます。それで、生徒たちはもっと深く音楽を楽しむことができるようになります。

教育の中でつぎに大切なのは忍耐心だと思います。生徒たちは常に学校や両親や自分から沢山のプレッシャーがあります。生徒のエミリーさんは、音楽が好きなのに、ピアノの試験が大嫌いでした。レッスンで疲れると機嫌が悪くなって、私に反抗的でした。私は音楽を楽しむためにあると思っていますから、エミリーさんにピアノの試験を受けなくてもいいと言いました。その代わりに、ポップスと二部合奏を教え始めました。今、エミリーさんは前よりずっと楽しんでいると思います。私はいつも生徒たちの希望をよく聞いて教えています。

ピアノ教師にとってビジネス・センスもたいせつだとおもいます。生徒を増やすために、生徒のリサイタルをしなければなりません。リサイタルはインターネットの広告よりずっと効果的です。また、名刺をいつも持っているのも大切だと思います。ピアノ教師は自営業なので、政府の健康保険がありません。生徒がたくさんいても、音楽を仕事にする生徒はすくないですから、大学に入るときに辞めてしまいます。夏休みも長いですから、収入は大変不安定です。ですから、ピアノ教師は将来を考えて、貯金をしなければなりません。

ピアノ教師は生徒の個性に合わせて、辛抱強く音楽の喜びを教えているのです。同時にビジネスマンでなければなりません。音楽を教える事はただの仕事ではありません。それは生き方です。私は生徒の横で座っているだけではありませんよ。

## 私の履歴書

自分が生まれてから今まで影響を受けた事は三つあります。それは移民、両親と学校です。この三つ私の命に関わるといっていいくらいとても大事な話題です。

まずは私は生まれる前に両親はバンクーバーに移民しました。けれども両親と私は私が五歳の時に香港に戻りました。私は香港で住み始めた時、香港の生活に慣れませんでした。漢字が読めないし、広東語をしゃべらないし、いつも学校の先生に叱られました。

けれど自分より両親の人生はもっと大変だったと思います。私のお世話をしたり、学校を探す以外にも、香港に戻る前に両親はたくさん喧嘩をしました。母は香港よりカナダがもっと好きだから、カナダに住みたいと父に言っていました。しかし父は仕事の関係で絶対香港に戻る、「仕方ない」って母に言いました。

香港に戻った後、すぐに小学校に入ってから、六年間の辛い生活を始めました。あの時の私は学校でいつも先生に叱られたし、クラスメイトにいじめられました。けれど卒業した後、結構厳しい中学校に入りました。もともと楽しみにしていた気持ちがこの一年間で変わり、この学校で勉強した事をちょっと後悔しました。なぜなら先生が厳しすぎるから、あまり楽しんではいないと思いました。一年後、インターナショナルスクールに入りました。私の運命はものすごく変わりました。この学校で日本語を勉強する事が出来るなんて、とても嬉しかったです。私と日本語の縁について結構おかしな事件がありました。新しいスクールに入る前に面接があって、一人の先生がこの質問を私にしました。「どの外国語を勉強したいですか？フランス語と日本語とマンダリン。一つ選びなさい。」それから、私は「マンダリンって何ですか？」母から教えてもらいたかったです。でも母から何も教えてもらえないで、しかも「早く答えなさい」って私は言われました。だから早速「日本語を勉強したいです。」という答え先生に教えました。

あれから、日本語が大好きだから、自分に「一生懸命に日本語を勉強します」という約束をしました。日本語を勉強して本当によかったと思います。しかも香港に戻って本当によかったです。もしもあのままカナダに住んでいたら、日本語や広東語を話す事があまり出来なかったかもしれません。今は英語が苦手ですが、日本語や中国語を学ぶ事が出来るなんてとても幸運な事です。将来に対して、結構便利な特技だと思います。将来の夢も見つかりました。将来に漢方医者と通訳になりたいです。それから、色々な場所に行って、患者を治療する時に四つの言語を使って、違う国の人々に翻訳します。とても素晴らしい仕事だと思います。だから私は引き続き将来の夢に向かうためにがんばります。

## 偏見なく世界を見ましょう

皆さんは日本と韓国の歴史をどのくらい知っていますか。昔はよくないかんけいであったことは知っているでしょう。私は韓国人で、さいしょは日本のことについてあまりよいとは思いませんでした。子供の時、私のおじいさんとおばあさんは私に「日本は悪いですよ。昔私たちにたくさん悪いことをしました。」と言いました。友達や先生までほとんどの人たちがそう言いました。「日本は悪い」と。子供の私はまだ日本人に会ったことも日本に行ったこともなかったんですが、たくさんの人たちがそう言うからそれが事実だと信じていました。私がまちがっていたのです。

でも、私の両親は違いました。二人は偏見がなく、とても開放的でした。両親は日本で勉強して、親は日本の会社に勤めていたので日本のごとを「悪い」と言いませんでした。代わりに私に「偏見は悪い」とおしえてくれました。幸いに私が小学校5年生だった時の冬休みに、二週間ぐらい一人で日本人の家族の家でホームステイするきかいがありました。そのおかげで、私が持っていた日本にたいする偏見をなくすことができました。

私が行ったところは名古屋でした。さいしょはとてもこわかったんです。一人だったこともありましたが、「日本人は悪い」と聞いていたので「みんな私をいじめたらどうしよう」としんぱいしました。でも、私がまちがっていたのです。ホームステイファミリーや私が会った日本人はとても親切でした。だれも私をいじめませんでした。それから韓国人にたいする偏見も持っていませんでした。私が日本語をしらなかつたら日本の家族の皆さんは韓国語の辞書を持ってきてくれたり、韓国の料理を作ってくれたり私を理解するために頑張ってくれました。皆さんがやさしくしてくれたことに、私は今までの考えがまちがっていたとわかりました。

日本の家族のおかげで私は名古屋でたのしい生活ができました。家族の中には私とおなじ学年の女の子もいました。私はその友たちといっしょに学校に行ったり、おじいさんから日本語をおしえてもらったり、お母さんが着物を着せてみてくれたり、家族の皆さんとお正月料理を食べたり、毎日の生活のなかで、私が持っていた日本にたいする偏見はなくなりました。偏見を持っているのは人との関係や自分の世界をせまくするだけだと言うことがわかったのです。

十年前の経験は私に世界を見る新しい目を開けてくれました。今、私は偏見なく世界を見るようにしています。そして、世界がグローバル化していくので、私は昔からある偏見にしばられず、できるだけ色々経験をして、世界を見る目をひろげていきたいです。皆さんも世界を偏見なく見ると新しい世界が見えるかもしれません。

## フェミニズムとわたしの生活

政治学のレポートを書く準備をしていた時、「女には、カナダは世界で一番いいところ」というフォーブズの記事を読みました。その時は、あまり気にならず、ただ、「うん、面白い記事だな」と思っただけでした。でも、もっと調べたあと、この情報は正しくないと感じました。

わたしこじんの生活はよい生活ですけど、カナダの社会全体では、女性問題がたくさんあります。例えば、男性と女性の間には、大きな経済格差があります。同じ仕事をしていても、男性と女性とでは、男性のほうが給料が高いです。

「フェミニズム」は、社会における女性の問題を正そうとする運動です。人は、「フェミニズム」という言葉を聞くと、かげきなイメージをもつかもかもしれません。たしかに、かげきな人はいます。でも、多くのはかげきではありません。いろいろな考え方がるからです。ただし、かげきな人は有名になります。

フェミニズムの考え方には大きなはばがあります。わたしこじんは、中道のフェミニズムだったら、賛同します。

中道のフェミニズムの目的は、男性と女性の所得格差をなくすこと、そして、世界中の女性の生活程度をあげることです。貧しい国の中には、女性に常勤の仕事が少なく、教育のきかいもひくいです。そして、カナダでは、2006年の統計によると、どくしんの母の23%が、貧困じょうたいにあります。これは、貧困じょうたいにある子どもの、40%にあたります。ですから、フェミニズムは、女性だけを助ける運動ではなく、子どもをも助ける運動です。どんな国でも、女性の教育きかいと雇用きかいが高ければ、国の経済力も高まります。

わたしのあこがれのフェミニストは、この問題を直すため、日夜つとめています。わたしは、女としてではなく、人間としてこの問題に取り組みたいです。

経済格差、その他いろいろな問題は、けっきょく人権問題です。人権問題は、政治が大事な役割を引き受けて、運動を進めなくてはなりません。人権問題を正さずして、正しい世界を作ることはいけません。わたしは、みんなが平等な世界に住みたいので、フェミニズム、および、人権問題に携わって行きたいと思っています。でも、中道で。

### 忘れかけていた自分の一部

皆さんは自分のカルチャルアイデンティティに対して考えた事がありますか。私は過去に自分のカルチャルアイデンティティについて迷っていた時がありました。私にはバングラデシュの文化などを大切にする両親がいます。私は両親と違って、カナダで生まれ育ちました。そのせいなのか、友だちや他人からバングラデシュの事について色々聞かれると、相手の質問に対してははっきりと答え返せない時が何度も前にありました。バングラデシュの言葉も書けない、読めない、親以外の人とベンガル語を上手に使うってコミュニケーションをとれないこんな私はあるおばあさんとの出会いで自分の中から消えかけていた重要なカルチャルアイデンティティに対して深く考えさせられました。

そのおばあさんと出会ったのは高校時代に働いていたアルバイト先ででした。ある日、そのおばあさんは私の名前がとても珍しいとほめてくれました。そして、私の名前に興味を持ち始めたせいなのか、そのおばあさんは私の出身地について訪ねてきました。でも、その時私はそのおばあさんにはっきりとバングラデシュではなく、インドの近くですと答えてしまいました。なぜあの時自分の国の名前が直接言えなかったのかと今で考えれば、それは私がバングラデシュが自分の一部のカルチャルアイデンティティとして認めていなかったからだと思います。私はもちろん幼い頃から両親と一緒に、バングラデシュの大事な記念日などを祝ってきましたが、私の両親は いっさい私にバングラデシュの文化や伝統的な物の大切さを自分で知っておくべきだと押し付けてきませんでした。なぜかという、両親は私がカナダで成長して行くため、私には何よりも自分の文化よりカナダの文化やマナーなどを身につけ、将来カナダの人々と仲良く生きて行く事が私にとって一番大事なのではないかと思っていたからです。

でも、あのおばあさんは私に自分のカルチャルアイデンティティに対して思い込んでいた大きな勘違いを気づきさせてくれました。それは、幼い頃からカナダの文化を身につけ、カナダの人々と仲良く日々を過ごして来た私が自分のカルチャルアイデンティティは当たり前前にカナダ人に近いと思っていた事です。なぜかという、私には子供の頃から、カナダ人の友だちが多かったです。それから、カナダで成長していくたび、カナダ人とのふれあい方を学んだ私は、自分の中のバングラデシュという一部のカルチャルアイデンティティを完全に忘れていました。確かに今で自分がしていた勘違いの事を考えると それは少しおかしかったと思います。それから、あのおばあさんがほめてくれた私の名前の珍しさと私はある事に気づきました。それは、私の名前はバングラデシュの人にしかないため、私がたとえどんなに自分のカルチャルアイデンティティをカナダ人だと思いつけていても、私の名前や顔ははっきりと両親から受け継いだヘリテージを一生私がどこへ行こうと、表し続けるという現実を目覚まさせてくれました。なので、あのおばあさんの一つの質問のおかげで深く自分のカルチャルアイデンティティに対して考えさせられた私はバングラデシュの文化、言葉、それから伝統的な物は自分のカルチャルアイデンティティの一部だと認め、誇りを持って生きて行くべきだと結論するようになりました。

## 上を向いて、歩こう

皆さんこんにちは。私の名前は夏です。

私は日本が大好きです。私は高校生のとき、アニメやドラマを通して初めて日本と出会いました。「ワンピース」や「なると」などのアニメを見て、私が感じた日本の印象は、日本人は情熱的で、家族や仲間との絆が強く、困難を乗り越える国民だということです。もっともっと、日本を深く知りたいと思うようになり、日本語や日本の文化を勉強するようになりました。日本のことを知れば知るほど、わたしは自分と日本という国の絆が強くなっていくことを感じました。しかし、2011年3月11日、そんな私が敬愛する日本に悲しい災害が起こりました。東北大震災です。テレビで、大勢の人が家や家族を失ったのを見た時、私は思わず泣いてしまいました。しかし、実際に被害にあった人たちは泣いてばかりではありませんでした。みんなが悲しみから立ち上がり、復興に向けて、希望を持ちました。あの私の大好きな曲、「上を向いて、歩こう」のように。

私の知る日本とは美しい四季があり、国民全員がお互いを思いやり、困難に直面しても、動揺せず、力をあわせて、乗り越えていく強い国です。これは、戦後の日本の復興、および経済成長を見れば、よく分かります。テレビで見る被災地の方々の笑顔や、水をもらうときも順番をちゃんと守る謙虚さには世界中の人たちが感動させられました。これは、日本人が先人から受けついで、次の世代へと伝えることができる貴重な精神的財産だと私は思います。

私は中国人です。歴史的に日本と中国の間には色々なことがありました。偏見が残っているのめたしかです。しかし、私はいち中国人として、そんな日本の姿を見て、多くを学びました。私のように考える中国の若者はどんどん増えているのではないのでしょうか。中国と日本の未来の関係にたいしても「上を向いて、歩こう」です。

以前、私は「100 個理由、給日本、也给中国」という本を読みました。このタイトルは「中国と日本には絶交する理由が百ある。しかし、同時に、中国と日本が友好関係をきづく理由も百ある」という意味です。私は非常にこの本に共感を受けました。今、私は日本語を勉強しています。いずれは日本の大学院に進みたいです。自分の目で真の日本について学び、中国に帰り、日本語教師になりたいです。中国にはいまだに日本に対する反感や誤解が根強く残っています。だから、私はできる限り中国人に本当の日本を伝え、もっと日本を理解してもらいたいと願っています。この本の作者のように、中国と日本のかけ橋になることが私の夢であり、両国のために、私ができることだと信じています。

最後になりましたが、日本のみなさん、私はあえて「頑張ってください」とは言いません。私は「一緒に頑張って生きましょう」と言いたいです。

以上です。聞いてくださって、ありがとうございました。

移民であることを、大きな声で  
—— 21 世紀の移民のコミュニティー

私の経済のクラスにいつも白い帽子をかぶっている男子がいました。授業中に発言するたびに小さい彼の声は震えていました。強いなまりを持っていたからでしょうか、彼が話し始めるとクラスメートはよく「何を言っているの？」という表情を見せ、時には面白がって笑う人もいました。けれども、彼は発言を途中でやめたことは一度もありませんでした。私は彼の行動が不思議でたまらなかったのも、ある日、彼にその理由を聞いてみました。すると、彼はこう答えました：「僕は 7 年前韓国から移民してきたため、英語は上手ではないです。だから、みんなと同じようになるまで頑張らないといけないんです。」

小さい声でしたが、心の深いところに届きました。彼の言葉には何か強いものが込められていたからです。8 年前に移民してきた私にはそれはありませんでした。下手な英語をしゃべりたくない、移民として見られたくないという気持で、私は劣等感をかかえて高校の三年間を過ごしました。けれども、白い帽子の彼は自分の英語がまだ完璧ではないということを素直に受け入れながら、小さい声でも少しずつ大勢の前で話そうと頑張っていました。声を震わせながら頑張っていました。彼の強さはおそらく、七年間の生活の中で、試行錯誤を繰り返して得たたまものなんでしょう。

長年の辛さに耐えて強くなった移民を私はたくさん知っています。しかし、この経験を短くする方法はないのでしょうか？

今のこの 21 世紀の情報社会では、生活上の経験だけではなく、インターネットで移民経験を集めている人々が増えています。例えば、日本の Okwave というソーシャルネットワークでは、異文化経験や知識のない人の質問にそれを持っている人が回答（かいとう）しています。また、北米で人気のある Meetup というサイトでは、移民に関するイベントを開け、それを必要としている人たちが実際に会って、サポートを提供しあえています。言葉を早く取得するコツや、新しい職場にあうコミュニケーションを探す方法などをネットでシェアすることで、多くの移民がカナダについての情報と知恵を幅広く集められるし、カナダに順応するのにかかる時間を短縮できるかもしれません。

しかし、新しい移民は一人一人違う問題を抱えているので、個人状況と地域に適切な情報手段を探すのは、カナダの社会をまだ理解していない彼らにとって困難なことです。異なるニーズを抱えている移民に、私は Okwave と Meetup のような様々な機能を持つサイトが一つに統合する必要があるのではないかと思います。そこで、現地の情報とイベントだけではなく、カナダに安定している移民と新しい移民の間のサポートの共有こそ大事だと思います。サポーターとそれを受けたい人たちが自由に登録できれば、お互いのニーズにマッチした人々に出会いやすくなるかもしれません。このように、カナダに安定している移民が新しい移民に知恵とサポートを続けて提供することで、強い絆を持つ移民のコミュニティーがネット上で出来上がるでしょう。そうすると、新しい移民は早くカナダで自分の居場所を見つけられると思います。私が出会った声の小さい男子も早く大きな声で発言できると思います。私は卒業後、このようなソーシャルネットワーク

を立ち上げたいと考えています。温かいサポートを通して、一人でがんばっている移民たちに新しい希望がきっと、届けられると信じています。

## おもちゃというのは

私にはダイホンホンという名前の友達があります。目が大きくていつも笑顔の可愛い女の子です。蝶ネクタイをいつもしていますが、女の子です。

初めてダイホンホンと出会った、5、6歳の頃、体が小さかった私は、彼女と横に並ぶとちびっ子にみえました。ダイホンホンの太腿はとても丈夫です。枕にちょうどいいです。お腹もフワフワで抱くと落ち着けて、何があっても安心することができます。彼女は私にとってただのおもちゃというより友人です。

私のこの考え方がおかしいと思われるかもしれません。とはいえ子どもにとっておもちゃというのはこのような役割が必要だと本日のスピーチで説明させて頂きたいと思います。

最近、スマートホンやビデオゲームなどが、手から離れづらい子どもをよく見かけませんか？家族と外食の時も、バスに乗る時も、まるで目が画面に貼り付いたように手も勝手に動いてしまうお子さんを私は何度も見たことがあります。そのなかで一番面白かったのは子どもだけではなくお父さんも奥さんの買い物を待ちながら二人の子どもとゲームを一人一台ずつ遊んでいたことです。あの三人は完全ににぎやかな周囲を忘れ、ゲーム世界に入ってしまったようでした。

みなさんはこんな近代おもちゃが普及する前に子供たちがどうやって遊んでいたか覚えていますか？

私が子どもの頃、紙くずでボールを作って指でサッカーをしたことを覚えています。その紙くずはおもちゃにもならないレベルかもしれませんが、子どもの想像力を育てるのには有功です。特に子どもたちが何人も集まって、自分の身体や廻りのものを使い、新しいゲームを生み出すことは一番楽しい遊びになると思います。その上創作力も育てられ、自分以外の人とよい関係を築く勉強にもなります。ただの遊びですが、人生の役に立つ部分があると思います。

それに対して、一人でパソコンゲームに夢中になり、擬似世界に入ってしまったのは、一概には言えませんが引きこもりになる可能性が高いとは思いませんか。以前見たニュースによると、引きこもりという社会問題は文化の違いに関わらず世界中多数の国にもあるそうです。発展した国々においては、特に深刻な問題になっています。このことは近代的なおもちゃ、つまり電子おもちゃ、が普及してきたのと相互関係があると考えます。

その上、子どもの教育という点から見ると、外からの影響ばかりではなく、子どもが自らの生き方を見つけ、価値を生み出せるようになればいいと思いませんか？ゲームのキャラクターの模倣で人を攻撃する子どもは見たくないでしょう。ゲームに熱中して我を忘れ、自分で考えることもできなくなる恐れがあると考えます。

一方ぬいぐるみと話すほうが問題だと思う人もいます。しかしこれは子どもの純粋な心ではないでしょうか？この純粋な心は大人になるにつれ、忘れてしまうことが多いですが、子どものときの幸せな思い出はそのまま残っていくと思います。好きなビデオゲーム等はそのような暖かい思い出が残ることはないでしょう。

もちろん子どものときから最新のテクノロジーを手にし、将来のハイテクの世界に順応できるよ

うに準備するという考えも大事ですが、パソコンなどの使い方は別に教えてあげて、おもちゃにはやはり子どもしかないと思想を発達させられる心や体などを動かすことができるもののほうが子どもの長期的な発展には望ましい事だと思います。

私は、今でもダイホンホンのことが大好きで、将来自分の子どもにも同じ様な想像力を育てられるプレゼントをあげたいと考えています。

ご静聴いただきましてありがとうございます。

## ひとすじの希望の星

みなさん、これを想像してみてください。あなたが飛行機に乗って、窓から夜空の下に広がる町のあかりを見えています。飛行機が滑走路にガタンと降り立ちます。パイロットが日本語で成田に着きました、というのを聞いて心がわくわくしてきます。自分にこれは夢ではない、と言いきかせます。本当に日本に着いたんです。ドキドキ、ドキドキ。

今、これを想像しただけで、心がわくわくしてきませんか。わたしは、今まで このわくわくする気持ちに共感することで、日本語の勉強を続けてきました。誰かとながれば、自分は一人ではないと感ずることが出来ます。空にひとつの星ではなく、たくさんの星の集まりとなって、星座をつくります。

困っている時や、自信がない時など、もうひとつの星が見つければだいじょうぶです。日本に行った時、わたしはそれに気がつきました。わたしはしょうたさんという人に会って、何もなかった空に希望という名の星達を見つけました。

しょうたさんに出会ってから、ずっとあこがれていた場所になじんでいく感じがしました。しょうたさんは、英語が話せましたが、わたしが日本語を話すように勇気づけてくれました。わたしが間違えても、しょうたさんは、それをほめて励ましてくれました。それで、わたしは受け入れられたと感ずることができたのだと思います。

わたしが日本語に苦戦しているときに、彼はいつも辛抱強く待って日本語で答えてくれました。英語で話したほうが早くわかったのに、しょうたさんは、わたしのために日本語しか使いませんでした。しょうたさんからニックネームももらいました。「もじゃ」といいます。みんな、なぜかわかりますよね。こうして友情が深まっていきました。しょうたさんと作った星座は、ずっと輝き続けて、今もわたしの日本語の勉強を支えてくれています。

日本を離れてもう 2 年がたちますが、4 月にまたしょうたさんに会えることになりました。日本に留学します。とても楽しみにしています。4 月に日本に行く飛行機の座席にすわったら、どんな気持ちになるのでしょうか。今度は、どんな困ったことや自信を失くすできなことが私を待っているのでしょうか。

でも何があっても私は大丈夫だと思います。必ず共感できる人と出会えると信じていますから。一緒にもっと大きな空を作っていけると思っています。それを楽しみにしています。

ありがとうございました。

## 人生の雑草

私が 8 歳で、弟が 6 歳の時、家の手伝いを散々させられました。例えば、車を洗ったり、部屋を片付けたり、ゴミ捨てに行ったり、父のゴルフクラブを磨いたりもしました。私と弟が 1 番きらいだった手伝いは、庭の雑草抜きでした。カナダの庭は広いですから、それはかなり時間がかかる仕事だったので、庭を半分に分けて、分担していました。いつも私は、いそいで仕事を終わらせてしまいましたが、弟は仕事をするのが本当に嫌いで、文句を言ったり休んだりして、雑草の方が早く生えて来ているのではないかと思うほど、なかなか終わりませんでした。そして、いつも父は「仕事には 2 つのやり方がある。きちんと文句なしで早く終わらせるか、愚痴を言いながらダラダラ終わらせるかだ。」と言っていました。その頃、弟は雑草抜きが自分のためになるとは思っていなかったかもしれませんが、あれから 15 年たち、弟は辛抱強くなり、一生懸命働く人間になりました。

今日、皆さんにお伝えしたいことは、今、苦しく面倒な出来事も、将来『必ず』自分の財産になるということです。とても簡単に聞こえますが、実際日々の生活の中で実践することは、案外難しいものです。皆さんは、生活の中の悲観的な出来事とどう向き合いますか。私の弟のように、愚痴を言いながら行動するかもしれません。でも、私は悲観的な出来事や無駄に見えるかもしれない雑草抜きにも、宝物のように大切なものがあることを学びました。

私はカナダ生まれの日系人です。私が中学 2 年生の時、父の仕事の関係で急に日本に引っ越すことになりました。それは私にとって、とても大きな出来事でした。なぜなら、カナダの友達と離れ、憧れていた高校に行けず、新しい国へ行く事が不安でたまらなかったからです。しかし日本に来て、自分が大部分の人と変わらないことに少し安心しました。でも、外見がいくら日本人でも、中身が外国人だったので大変でした。日本語で言いたいことが言えないのは、私を困らせました。最初は頑張っていました。やはり自分の話し方が気になって、人前では静かになってしまふことがよくありました。そして、日本語を間違えることを恐れて、学校と部活以外はいつも家にいました。今までの人生でもっとも厄介だった雑草、悲観的な時期でした。そして 2 年後、ついに限界が来ました。私は家族の元から離れ、たった 1 人でカナダに戻りました。日本にいた 2 年間は、私の人生の中で最も忘れてしまいたい大きなマイナスな出来事でした。

その後、私はカナダの高校を卒業し大学に入り、日本語のクラスを取ることにしました。それまで私は日本で過ごした 2 年間は、雑草のようにムダなことだと思っていました。しかし、今、思い返してみると、日系人の私にとってその 2 年間はかけがえのない経験だったことに気付きました。私の中に、少しだけですが日本人の生き方や考え方などの大切なことが身につけていたのです。そして、日本語をもっと上達させたい気持ちがわいてきたのです。こうして皆さんの前で日本語でスピーチをすることは、あの時の私にとって想像もつかないことでした。人は時には、人生の中で、ゆっくり 1 つ 1 つ雑草のように面倒で 時間のかかることを乗り越えていかなければなりません。しかし、それを乗り越えた先には、大きな宝物が待っていると信じています。みなさんも、これからの人生の中でたくさん苦勞することがあるかもしれません。その時には、この雑草の話をお話していただければ幸いです。

ご清聴いただき、ありがとうございました。

## 私の人生を変えた小説

「より多くの言語を知っていれば、人間としてより大きくなれる」

私は、幼ない頃からこの言葉を母からよく聞かされてきました。私の母国語はウクライナ語とロシア語ですが、母は私を英語が学べる小学校へ通わせましたので、英語は6歳から学んでいます。また、母は「人生で成功するためには、いろいろな面を持った人間になるほうが良い」という考えから、私にダンスも習わせました。

言われるままにこれらを始めた私ですが、その頃は母の意図を全く理解していませんでした。そして時は流れ、一人の友人が、私にある一冊の小説を薦めてくれました。それは村上春樹のノルウェイの森でした。この本を読む前の私はダンサーの道に進むべきか、または経済学の道に進むべきか悩んでいました。しかし、友人の勧めに従ってとにかく読んでみることにしました。

まず、私は村上春樹の生い立ちに共感し、惹かれました。両親とも国語教師だったため、彼はその影響を受けて読書家に育ちました。しかし日本文学一辺倒だった両親の価値感を嫌い、欧米翻訳文学に興味をもち、その他、1960年代のエルビスプレスリーやジャズなど、アメリカの文化に傾倒し、ジャズ喫茶を開いたことなど、多くの文化を学びたいと思う点に私は共感を覚えました。彼は小説家ですが、現代アメリカ文学の翻訳もしています。そんな彼の小説は私に多大な影響を与え、私の価値観は広がり、日本語を勉強をするきっかけとなったのです。彼の小説を読んだことで、自分にとって日本の文化を学ぶことは価値があるという事に気づきました。

私のお気に入りの彼の小説は「羊をめぐる冒険」と「ダンス・ダンス・ダンス」です。これらの小説は、私に“何事もあきらめず、目的に向かって邁進していく”という大切な人生の教訓を与えてくれました。

こうして迷いの晴れた私は、日本語と英語の翻訳を専攻できる大学に入学しました。そして卒業後、私は、冒頭でお話した母の教えに従い、安易に翻訳者の道には進まず、多くの事を吸収できる道を選択しました。

近い将来、カナダの日系企業で働けるように、現在はビジネススクールで勉強しています。私は、日本人の方々は働き者で、勤勉だと思います。そんな方々と一緒に働きたいと思っています。村上春樹は私に「人生はダンスと同じだ、おもしろいがチャレンジの連続だ」人生に挑戦する気構えを教えてくださいました。

私はダンサーになる夢も諦めてはいません。いつか日本でダンスの公演をやっているかもしれません。この夢が実現した時には、皆さんをご招待します。お楽しみに！

機会があれば是非皆さんも村上春樹の小説を読んでみてください。大きな影響を受けるかもしれません。

## 涙のディズニーランド旅行

皆さん、夢と現実が違うものであったという経験がありますか？ディズニーランドへ行くことが私がまだ三つだったころの夢でした。そこに行けばディズニーのキャラクターのミッキーやドナルドたちに会えて楽しいと思ったからです。それが現実となったのが私が四つのとき、東京ディズニーランドへ行ける機会ができたときでした。ところが、その夢は無残にも砕かれてしまったのです。そして四歳の私はディズニーランドを泣きながら逃げ帰ってしまったのです。

私たちが最初に乗ったのが入り口から左のほうにある乗り物でした。乗り物の名前は覚えていませんが一見普通の船の乗り物にしか見えませんでした。ところが、乗っていた船が暗い通路へ入ったとたんに驚かされたのです。私はそのころ、暗いところへ行くが大の苦手だったからです。突然、目の前に巨大な骸骨の顔が現れ、周りにも骸骨や怖そうな海賊が現れ、私は急に泣き出してしまいました。四歳の私にとっては、あの骸骨が暗闇の中でまるで怪物に見えたからです。その後、憧れのミッキーやドナルドに会っても怖くて近くに行くことができなかつたほどでした。むしろ早く帰りたい気持ちで涙が止まりませんでした。それ以来、父と母は私を「泣き虫桂樹」と呼び始めました。朝から夜のパレードまでいたのにあまり乗り物には乗れなかつたし、夢に見ていたディズニーランドが恐怖のディズニーランドとなってしまいました。家族たちはお土産を買ったり、楽しかったねと会話を交わし続けましたが、私は無言のまま歩き続け、父に手を引かれ、とぼとぼと歩いただけでした。

それから 15 年がたってなぜ楽しみにしていた気持ちが逆に帰りたい気持ちへ一転したのか、思い出すこともあります。19 歳の今となっても、夢と現実の違いがあるという経験をしているからです。自分の考えが甘かったといつも感じるのです。しばらくは落ち込むこともありますけれども、いつの間にか私はまた夢に向かってやろうという気持ちになります。それは、母は私がディズニーランドへ行きたいというと「どうせまた泣いて、乗り物に乗れないからお金ももったいないよ」とよく言いますが、今でもディズニーランドは私の憧れの場所となっているからです。あのころのトラウマをすっかり忘れたんだと思います。また行ける機会があれば、すべての乗り物に乗りたい気持ちでいます。人間はどんな苦い経験があつたとしてもそれを忘れる力やそれをいい方向へ変える力あるのではないかと信じています。